岐阜県 岐阜市

医療法人
慶睦会 千手堂病院

院長：初音俊樹氏

稼働電子カルテ
Medicom-CK
（PHC）

リーズナブルなWeb型電子カルテを導入して、高齢者医療を支える地域多機能病院を目指す

2017年、先代から医療法人慶睦会 千手堂病院の院長として経営を受け継いだ初音俊樹氏は、2019年2月に電子カルテシステム「Medicom-CK」を導入。療養型医療に特化した施設からの脱却を図り、高齢者医療全般に診療の幅を広げている。「Web型電子カルテはリーズナブルで、当院が目指す在宅医療への展開などにも役立つ」と同システムへの期待を語る初音氏らに、電子カルテシステム導入の経緯と新システムの有用性について聞いた。

地域包括ケア病棟を開設して医療・介護機能の拡充を推進

――千手堂病院の沿革とIT化を実施するに至る経緯からお聞かせください。

1949（昭和24）年に開設された千手堂医院を嚆矢とする千手堂病院は、1954に医療法人化し、1973年には県下初となる岐阜心臓血圧センターを設立するなど、昭和時代には内科、循環器科、心臓血管外科、リハビリテーション科を有する循環器領域の急性期病院として診療を行ってきました。

平成時代になってからは高齢者への医療需要の高まりを受け、療養病床を開設し、重症度の高い、所謂“寝たきり”の患者さんを積極的に受け入れてきました。

私は、2013年に当院に入職し、2017年には院長に就任しましたが、このままの形態では時代にやがてついていけなくなると考え、療養病床だけでなく、地域の医療機関や介護施設と連携し、より幅広い高齢者医療を展開したいと望み、病院の改革に着手したのです。そして、その改革の象徴として、電子カルテシステムの導入を決断しました。

「新しい理念として、『療養する人・支える人・働く人』地域の全ての人に快適な環境を創出します。」を新理念に掲げて病院運営に邁進します」と話す初音俊樹氏

私が当院に戻った当時は、まだ紙のカルテを使用していました。実務上の問題として、紙のカルテの文字が読めない、紙の記録が溜まり続けて、その保存と運用が大変なことなどがありました。また、患者数の集計や経営分析、症例の研究のためにデータを取り出すのに膨大な手間と時間がかかることも不満でした。経営、臨床の質を担保し、病院の改革を進める上で、ぜひ電子カルテシステムを導入したいと思ったのです。

――電子カルテシステム導入の経緯と選定理由をお聞かせください。

電子カルテシステムは、中小規模病院にとって高価な代物です。私が導入を検討し始めた当初、大手ベンダーの急性期病院向けのパッケージシステムか、安価でも診療所向けのコンパクトなシステムの情報ばかりで困っていました。そこで、各方面を当たって中小規模病院向けで、機能的にも価格的にもちょうどよいシステムを探したところ、PHCの一般・療養型中小規模病院向けのWeb型電子カルテシステム「Medicom-CK」にたどり着いたのです。

「Medicom-CK」は、価格がリーズナブルであるという点が採用の決め手となりました。それ以外にも、画面構成がシンプルで、必要な患者情報が1画面にまとめられていること、レイアウトを崩さずに文字サイズを拡大して操作画面を見やすくすることが可能であること、画面切り替えや操作中のクリック数が少なくて済むことなど、使い勝手が良い点も高く評価しました。

また、導入に際しては、PHCが真摯に対応してくれ、当院の要望を聞き入れてシステムをより使いやすいものに改良してくれたことも助かりました。当院の「Medicom-CK」は、当院とPHCがまさに共同で作り上げた電子カルテシステムと言えるのではないでしょうか。

――「Medicom-CK」に対する導入後のご評価についてお聞かせください。

電子カルテ稼働開始から2年が経過しましたが、その間大きなトラブルもなく安定した稼働を続けています。

評価したい点の１つめは、求人する際に若いスタッフへの訴求力が大きいことです。電子カルテシステム導入に際しては、IT化に対応できなかった職員が退職するなどの問題も起こりましたが、結果として組織の新陳代謝を促すことに繋がりました。

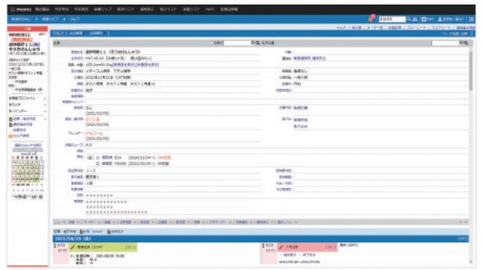
経営面についても、診療記録等を簡単に抽出でき、病院運営・経営に必要なデータを素早く収集・分析できるようになりました。紙による運用は一部残ってはいるものの、その量を大幅に減らすことができています。

また、Web型のシステムであることから、通信環境が整っていれば端末を院外に持ち出して在宅診療に活用することも可能で、当院が今後力を入れたい方向性にもマッチしたシステムだと感じています。

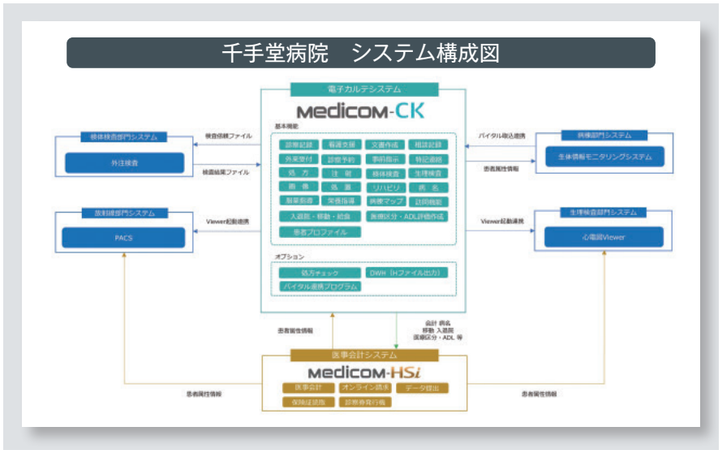
――今後の病院全体の展望についてお聞かせください。

当院は来年秋に新築移転を計画中です。そのコンセプトは“岐阜のど真ん中の地域多機能病院”です。当院は地理的に岐阜市の中心部にあることから、その地の利を生かして、当院と急性期病院、在宅や介護施設をつなぐ中心的役割を果たす地域包括ケアの要の病院になれるよう、建て替え作業を進めていきます。

一般・療養型中小規模病院向け電子カルテシステム「Medicom-CK」電子カルテ画面①



端末に特別なソフトのインストールが不要なWeb型システムのため、インターネットを利用するような馴染みのある操作感を実現。PC、タブレット、スマホ等、デバイスを限定せず利用が可能。



Interview

医療法人慶睦会 千手堂病院
事務次長
片桐 圭一氏
かたぎり・けいいち

企画室
天野裕香氏に聞く
あまの・ゆか

「電子カルテ端末は現在約40台が稼働しています。Web型の特性を生かしてコストを抑えながら、新病院ではiPad端末なども増やしていきたい」と話す事務次長の片桐圭一氏。

千手堂病院では、初音院長のインタビューにもあるとおり、2019年2月にWeb型電子カルテシステム「Medicom-CK」を導入。同システムの導入および管理と運用を担当するために2018年同院に入職した片桐圭一氏は、電子カルテシステム導入当時をつぎのように振り返る。

「電子カルテ導入は、新築移転と同時に行うべきという意見もありましたが、移転前に医療ITに慣れてもらう方がよいと考え、前倒しでのシステム導入となりました。

2018年10月に作業を開始してから4ヵ月という短期間での導入となり、PCなどITに精通したスタッフがほとんどいない中で、部門間のすり合わせやシステムの調整を行うのには苦労しました。さらに長年紙カルテで運用してきたスタッフが、電子カルテシステムにすぐ慣れてくれるかという点も大いに不安でしたし、Web型という点も、安定した稼働を続けられるのか心配でしたね。

しかし、蓋を開けてみれば、2019年2月の稼働以来、当初こそ紙カルテを参照することなどはありましたが、今はほとんど紙カルテを使用せずに診療を実施しています。サーバも、停止等のトラブルもなく安定した稼働を続けており、システム導入に携わった担当者として安堵しています。

システム構築には、ベンダーであるPHCの担当者のひとかたならぬ協力があったことに感謝しています」

療養病棟運用に適した機能を追加 機能の効率化と収益性向上を実現

企画室の天野裕香氏は、長年の急性期病院での勤務を経て2017年に同院に入職し、地域包括ケア病床一部転換に際して看護の質向上と職場環境の整備に尽力してきた。現在は、総合的な病院運営に携わっているが、電子カルテシステム構築時には、当時、看護部長として深く関わった。「Medicom-CK」導入の経緯について、天野氏はつぎのように話す。

「初音院長の病院改革を進めるためには、経営的な戦略の再構築が不可欠です。そのためには入院した患者さんの氏名を確認するだけで１、２時間かかる紙カルテでは無理ですし、効率的にデータを取り込むには電子カルテが欠かせません。しかし、当時は病院向けの電子カルテシステムは高価なため、予算的な問題がネックとなり、話は遅々として進みませんでした。そのうち、３社のシステムが候補に挙がったのですが、『Medicom-CK』はその中で唯一Web型電子カルテシステムでした。

Web型電子カルテシステムのメリットは、更新に過大なコストがかかりませんし、ソフトライセンス費用がかからないため、運用途中での端末増設時にもその費用を大幅に抑えることが可能です。また、導入に際してはPHCの開発担当が対応してくれたので、療養病床の運営に適したさまざまな機能を開発してくれた点も有難かったです」

特に評価が高かったのは、療養病棟におけるコストの自動算定と、バイタルデータの自動転送機能であったと天野氏は話す。

「療養病棟では、慢性期の患者さんについて、主に医療区分２～３などの医療必要度の高い患者さんを受け入れることが高い収益性につながります。

従来は医療現場におけるコスト算定の漏れが多かったのですが、PHCに依頼してシステムに実施入力を行うことにより自動的にコストを算定し、医事システム『Medicom-HSi』にデータをシームレスに送る機能を『Medicom-CK』に実装してもらい、今述べたようなコスト算定漏れがなくなりました。

また、医療区分３に該当する患者さんに対しては、動脈血酸素飽和度、血圧、心電図、呼吸などのバイタルサインを、少なくとも４時間間隔で計測しなければならず、スタッフがこれを実現するのは、極めて困難でした。例えば、大規模病院などで導入されているICU専用の部門システムなどには同様の機能が備わっていますが、当院のような施設ではそこまで大規模なスペックは必要ありません。そこでPHCとバイタル機器メーカーである日本光電に依頼し、『Medicom-CK』にバイタルサインを自動的に転送する機能を追加してもらいました。なお、日本光電のモニター出力形式がHL7対応であったため、今回、低価格での接続が可能でした。

こうした機能を追加したことは、病院全体の収益性を高めるとともに、看護師ら医療スタッフの労力軽減にも貢献したと実感しています」

Web型ならではの拡張性を生かし 電子カルテの機能拡充を図る

片桐氏は、稼働後2年が経過して、スタッフのITに対する技量とレベルが上がってきたことを実感していると話す。

「IT化によって若いスタッフが応募するようになり、組織の新陳代謝が進んでスタッフの平均年齢は30歳代になりました」と語る企画室の天野裕香氏。

「システムに関する委員会は３ヵ月に1度、定期的に開催していますが、電子カルテシステムに対する現場からの要望も多く挙がってくるようになりましたね。『Medicom-CK』はWeb型であるとともにパッケージ型のシステムでもあるので、カスタマイズは簡単にはできないでしょうが、今後のバージョンアップ等で反映可能な機能があれば、ぜひ実現してもらいたいです。

具体的には、当日の入退院予定の患者リストやカンファレンスの内容、朝礼での伝達事項や会議の予定、職員の出席状況など、病院経営に関する資料を電子カルテシステムのトップ画面等に表示するような機能があれば、職員の病院経営に対する意識も高まるはずです。このように、診療以外の情報をいかに共有するか、工夫していただきたいですね」

天野氏は、今後電子カルテシステムの機能拡張に期待している。

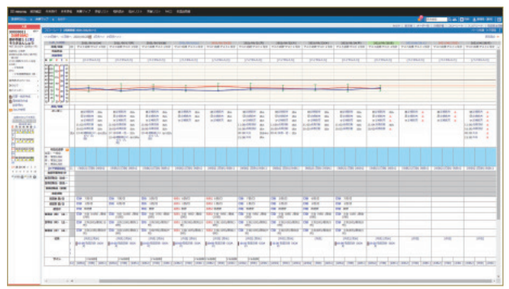
「当院では“みんなで作る病院作り”をモットーに、療養病院で働く意義や働き甲斐のある職場作りを進めていくことを考えています。そこで、今後は在宅診療に力を入れていくので、重症の入院患者さんに対する診療機能と併せ、その機能拡充にPHCにも協力してほしいですね」

千手堂病院のサーバー室。電子カルテ化によって紙カルテ等ペーパー類の大幅削減を実現。部門システムとの連携を深め、ペーパーレス化を目指すという。

システムの今後の拡張について片桐氏は次のように話す。

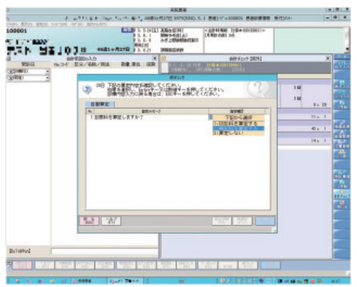
「現在ナースステーションのPC端末で実施している病棟での入力作業をベッドサイドで行えるようにするため、iPadなど新しいデバイスの導入を検討中です。Web型は端末ライセンスの追加費用が不要なので、低コストで端末数を増やすことができるなど、システムの拡張性が高いのが大きな特徴ですので、大きな投資をすることなく実現できるのではないかと期待しています」

「Medicom-CK」電子カルテ画面②



必要な患者情報は一画面にまとめられているなど、画面切替や操作上のクリック数を抑える設計で、高いレスポンス性と共にスムーズな診療を実現。

「Medicom-HSi」レセコン画面



病名、現病歴、主訴などの患者情報に加え、治療経過を年表形式で一画面表示。患者の詳細な情報を容易に確認することができる。

Hospital Infomation

医療法人
慶睦会 千手堂病院

住所：岐阜県岐阜市千手堂中町1丁目25
標榜科目：循環器内科、内科、心臓血管外科、整形外科、小児科、心大血管疾患リハビリテーション、リハビリテーション科

高齢者医療に対する診療体制強化を推進 新病院移転を見据えた医療改革を実行中

岐阜市のほぼ中心に位置する千手堂病院は、療養病床35床、地域包括ケア病床15床の計50床を有する中小規模病院。院内にはリハビリや生活の介護を支援するデイケアセンターやリハビリ施設、介護サービス事業者、医療機関、関係機関と連携、調整を行う居宅介護支援事業所を有し、高齢な患者に対する幅広い医療・介護サービスを提供している。また、初音院長の専門が循環器領域であることを生かし、同院では急性期病院以外では普及していない心臓リハビリに力を入れており、それも大きな特徴である。

スタッフは初音院長を含む常勤医3名、看護師32名と事務職員を合わせ119名が勤務しており、コロナ禍の中、病床稼働率は約90%、在宅診療に登録している患者数は150名を数える。